

第1章

漢族と非漢族をめぐる史実と言説

——広東省を中心に

片山 剛

Guiding Question

近代の国民国家を研究する視点として、ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」が知られています。ここでは、近世中国における漢族（やその下部単位）にかんする言説（伝説）をとりあげ、その伝説内容と史実とを比較しながら、その伝説が作られた目的を考え、さらにその伝説に対する理解が近代にどのように変化したかを検討します。

そこで、中国でも、また日本（神武天皇東征神話など）でも、あるいは他の国や地域でもかまいませんので、ある民族（やその下部単位）にかんする前近代の言説について、いつ、何のために作られたかを考えてみましょう。また近代の言説は、前近代の言説と無関係に作られているのか、それとも前近代の言説を下敷きにして作られているのかも考えてみましょう。

1. 黄河文明とその担い手

次の一文は、中国古代史家の原宗子が「中国」史の特徴を的確にまとめたものです。ながい複文ですので、腑分けしながら読んでみてください。また、引用者が中国にカッコを付けた理由も考えてみてください。

中国は、①古代文明発祥の地のうち、まとまった政治機構が、②それを担う人々の交代にもかかわらず、そしてまた機構自体の質的・構造的変化にもかかわらず、同一地域に二千年にわたって、③古代文明を支えた人々の用いた言語体系をほぼ継承し一定の人口集中を維持して存在し続けた、地球上に類例乏しい場所である。（原宗子 2005：5）

主要な主部と述部を抜き出すと「中国は……地球上に類例乏しい場所である」となります。中国を国ではなく、場所として捉えていることが、まず目を引きます。最初に中国にカッコを付けたのも、国ではなく、場所としての中国の歴史が語られていることに注意してもらうためでした。つぎに、次要な主部と述部を抜き出すと「まとまった政治機構が……存在し続けた」となります。「まとまった政治機構」とは、秦漢帝国以降、皇帝とその手足となる中央集権的官僚制にもとづく統治機構を指します。最後の王朝である清朝に続く中華民国・中華人民共和国でも、連邦制ではなく、中央集権的統治が続いています。そして、この文全体が文明の盛衰という観点から、中国という場所の特色を語っていることがわかります。

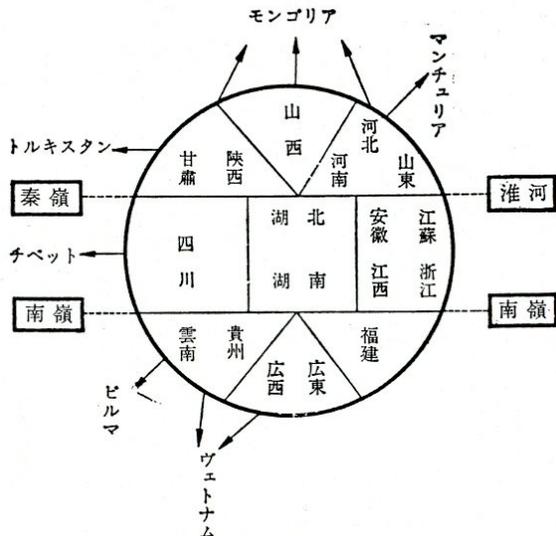
さて、①「古代文明」とは、ご存知のように、旧大陸ならば西からエジプト、メソポタミア、インダス、そして黄河の四大文明を指します。このうちエジプト、メソポタミア、インダスの三文明では、麦栽培のための畑作灌漑（稲作のための水田灌漑ではありません）によって、養分を補給して単位面積当りの収量を増大させ、その結果、多数の非農業人口を養うことが可能となって都市文明が興りました。しかし畑作灌漑の失敗による土壌のアルカリ化（塩類集積）で収量が減り、支えることができる人口数が激減して、文明が衰退したり、消滅したりしました（薄井清 1976 : 32-40）。

消滅したのはインダス文明です。この文明を興した人々（一説にドラビダ人）は、文明の衰退期に侵入してきたアーリア人によって四散し、そしてインダス文明で用いられていた文字（インダス文字）は、後代に継承されなかったため、今でも解読されていません。衰退したのはエジプトとメソポタミアの文明です。かつては青々とした麦畑が広がっていたエジプトやメソポタミアに、塩類集積による不毛の砂漠が広がっているのはご承知のとおりです。

一方、黄河流域に興った文明は衰退（つまり収量が減少）せずに存続しています。なぜでしょうか？ 他の三文明とは異なり、黄河文明の農業は畑作灌漑に特化せず、天水農業がかなりの割合を占めていました⁽¹⁾。そのため、土壌のアルカリ化はほとんど起こりませんでした。これが黄河文明が衰退しないで持続した大きな要因です。しかも文明の発祥地は華北の黄河流域ですが、

その地理的範囲は次第に水田地帯の華中・華南へと拡大し、そこはChina proper⁽²⁾(図1-1)と呼ばれています。

③「古代文明を支えた人々の用いた言語体系」とは、漢字を用いた漢語(漢文や現代中国語)を指します。漢字の発音や漢語の語法は時代とともに変化しますが、「ほぼ継承」されています。



中国(シナ本部)の地域区分

図 1-1 China Proper

出所 『教養人の東洋史(上)』社会思想社(現代教養文庫), 1966年, p.15(小倉彦彦執筆部分)

さて、上の引用文で一番興味深いのは、②「それ(=まとまった政治機構)を担う人々の交代にもかかわらず」という箇所でしょう。すなわち、黄河流域(地理的範囲の拡大後ならばChina proper)の歴代の統治者=政治機構を担う人々の血統は、時代とともに変遷したということです。歴史の実際に照らせば、たとえば五胡十六国時代以降は鮮卑などの民族が黄河流域の統治者となり、のちには隋・唐といった王朝を立てます。また契丹、女直(海西女直)、モンゴル、満州といった民族が統治者となった時期もあります。血統(DNA)こそ黄河文明を興した人々のそれと異なりますが、古代以来の地力維持農業を衰退させることなく継続し、文化面では漢字で書かれた古典を受容するとともに漢語による思索をさらに進めて、黄河文明を継承・展開していきます。

統治される住民についても、秦漢以降の華北には、東北・北・西北の方面から鮮卑・匈奴、さらに契丹・女直等々が流入・定着し、融合が進んでいきます。したがって、秦漢時代に華北に住んでいた人々の血統と、いま華北に住んでいる人々の血統とは同じではありません。そして、中華人民共和国の「民族識別工作」では、漢族以外に55種類の「少数民族」が公認されていますが、そのなかに鮮卑族や匈奴族はありません。つまり、かつての鮮卑や匈奴は、いまは漢族のカテゴリーに含まれています。換言すれば、華北の漢族の実体は外から流入してきた多様な血統の融合体といえるでしょう。

ところで、現在の華中・華南における人口の大部分は漢族が占めています。素朴な疑問として、それは華北の漢族が華中・華南へ移住し、先住の非漢族を駆逐した結果なのか、それとも華中・華南の非漢族が漢族に転化した結果なのか、と問いたくなります。もちろん、華北の漢族が実際に華中・華南へ移住した事実はありますが、現在の華中・華南の漢族すべてが北から来た漢族の末裔とは考えられません。筆者は、現在の華中・華南の漢族の多くは、土着の非漢族が漢族へ転化した結果と考えています。ただし、これを実証するのはきわめて困難です。しかし、ある程度実証できるのが、本稿で紹介する広東の珠江デルタ地域における〈非漢族の峒寮 → 峒寮と漢族が融合した「土人」→ 漢族としての広府人〉というプロセスです。以上、史実に照らすならば、漢族を血統（DNA）を超えて「黄河文明を継承する者」と定義できるでしょう。

しかし史実ではなく、漢族をめぐる言説に目を向けてみると、たとえば後段で紹介するように、血統・出自に重きがおかれた「漢族西方起源説」が20世紀初頭に登場し、全国の知識人に受容されます。漢族にかんする言説で、このような血統・出自に重きをおいたものは、ローカルなものならば、牧野巽が紹介しているように、実は前近代にかなり多数存在します（牧野巽1985）。ただし、伝説の内容を史実と比較したり、その伝説が作られた目的を解明したりできるような言説は多くありません。そのような言説として、本稿では広東の珠江デルタ地域の人々に浸透している珠璣巷伝説をとりあげます。また、近代に本伝説に対する理解がどのように変化したかについて

も検討します。

2. 広東社会史における非漢族と漢族

始皇帝が紀元前 221 年に「天下」を統一したこと、この事実はよく知られています。ところで、この場合の「天下」とは、秦を含む戦国の「七雄」の版図を指し、今の広東・福建は「統一」の対象外でした。というのも、福建からベトナム北部にかけては、「七雄」とは別に、「百越」とか「越人」とか呼ばれる、多種多様な非漢族の社会（「越人社会」）⁽³⁾が存在していたからです（図 1-2）。始皇帝は紀元前 214 年までにこの「越人社会」を征服し、秦の統治下におきます。しかし秦末の混乱のなかで、広州を中心に南越国が独立します。その版図はいまの広東・広西を超えてベトナム北部にまで及んでいました。南越国（紀元前 203-111）は、国王こそ秦の元官僚ですが、住民の大部分は越人でした。秦を継いだ漢帝国は、紀元前 2 世紀の第 7 代武帝に至ってやっと南越国を征服します。それから唐末までの約 1000 年間、広東・広西・ベトナム北部は、いずれも中国歴代王朝の統治下におかれることになります。

ところが 10 世紀に唐が滅ぶと、ベトナム北部は中国から独立し、北宋による併合の動きも退けて、以後は一時期を除き、基本的には独立を維持して現在に至ります。一方、ベトナムが独立した 10 世紀に、広東でも南漢国（909～971）が独立します。しかし南漢国は独立を維持できず、60 年間ほどで北宋によって併合され、広東はその後独立することなく現在に至ります。つまり、広東の歴史を表面的に見るなら、紀元前 2 世紀の前漢武帝による南越国の征服から現在までの約 2000 年間のうち、10 世紀の五代における南漢国の独立を除き、一貫して中国王朝（及び中華民国、中華人民共和国）の版図でした。

それでは北宋による併合のあと、広東では独立の動きはなくなってしまうのでしょうか。実は、16 世紀までは非漢族を中心とする反乱が頻発して独立する可能性もありましたが、16 世紀後半にはそのような動きはほとんど

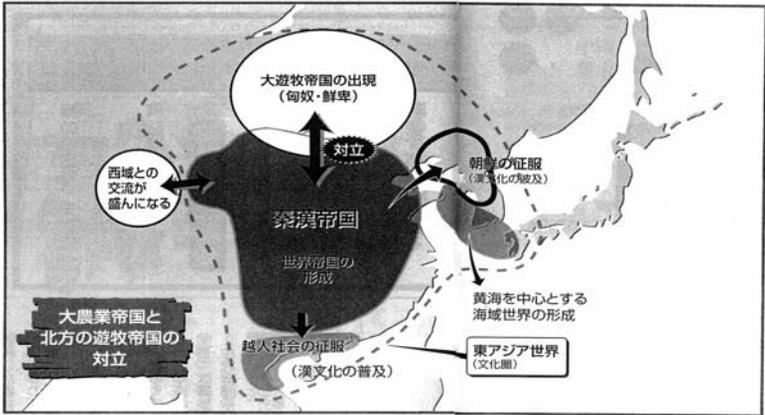


図 1-2 秦漢帝国による越人社会の征服

出所 宮崎正勝『早わかり東洋史』日本実業出版社，1999年，pp.40-41

なくなります。そして、ちょうどこの時期に、広東省の中心に位置する珠江デルタ地域において、漢族が主要な居住民となり、漢族社会が成立してきました。

ここで、16世紀の珠江デルタ地域に登場する漢族⁴⁾とは、日本では一般に「広東人」と呼ばれ、現地では広府人と呼ばれる漢族のサブ・グループです。広府人は珠江デルタ本体を中心に、清代の行政区画でいえば広州府や肇慶府等に分布し、その言語は粵語（あるいは広州話、日本では「広東語」と呼ばれる漢語方言です。

本稿では、広府人が歴史の舞台に登場してくる際に作られた、かれらの血統・出自にかんする伝説をとりあげ、そこに込められた意味や作られた目的を解明し、また、近代におけるこの伝説に対する理解のあり方の変化を考察することにします。

以下ではまず、珠江デルタ地域とその周辺における社会の基本的構図を、地形にもとづく生業・担い手の類型から示し、つぎに各類型の担い手および元末までの歴代王朝との関係史の概略を示して、珠江デルタ地域における広

府人登場の意義を明らかにしておきます。

地形にもとづく生業・担い手の類型は大きく3種類に分けることができます(表 1-1)。第一類型は山地です。ここでは非タイ語系の「獠族」が移動しながら焼畑農業を行い、雑穀類を栽培しています。第二類型は低湿地を除く山麓・丘陵・台地などの平地(平地1と呼ぶ)です。ここでは定住の稲作が、土着であるタイ語系の「峒獠」(以下、カッコ略)および秦漢時代以降に北から移住してきた漢族によって行われています。峒獠と漢族とは、生産・生活空間と生業を同一にすることから、次第に通婚等を通じて相互同化していきます。この相互同化によって生まれた人々は、『旧唐書』では「土人」と呼ばれています。以上の第一と第二の類型は、いずれも9世紀以前の技術に依拠する類型です。

第三類型はデルタなどの低湿地(平地2と呼ぶ)です。東アジアにおける低湿地の開発は10世紀の江南デルタに始まり、その技術は次第に国内各地や東アジアの近隣諸国に広まっていきます(濱島敦俊 1990: 75-80)。珠江デルタでも宋代以降にこの技術が導入され、徐々に開発されていきますが、開発が本格化するの明代です。そして、この開発に従事したのは、「土人」の一部がアイデンティティを転換することによって生まれた広府人です。

表 1-1 技術・地形・生業・担い手による分類

技術	9世紀までの技術		10世紀以降の技術
地形	山地	平地1 (山麓・丘陵・台地)	平地2 (低湿地)
生業	移動, 焼畑, 雑穀	定住, 水稲作	定住, 水稲作
担い手	非タイ語系の獠族	タイ系語系の峒獠と「土人」(のち、「土人」が転化した広府人)	「土人」が転化した広府人

出所 片山剛 2008, p.24 の表を修正

つぎに、元代までの珠江デルタ地域の住民と王朝との関係について整理しましょう。住民の王朝に対する関係は、①化外の民、②(中間的存在)、③「齊民」(以下、カッコ略)の3種類に大別できます。①化外の民とは、中国王朝との関係をまったくもたない者です。③齊民とは、中国王朝によって戸

籍に記載され、かつ徭役・税糧（土地税）等を正規に負担する者を指します。

②〈中間的存在〉とは、中国王朝との関係をもってはいるが齊民ではなく、羈縻政策や土司・土官制度などの間接統治の政策や制度によって〈公認された特別待遇〉を受ける人々を指す筆者独自の用語です（片山剛 2006: 38, 41）。なお、珠江デルタ地域のような漢族と非漢族が接触する地域では、各類型の担い手と王朝との関係を固定的に考えるのではなく、担い手が王朝に対してもつベクトルの向きや大きさを考慮する必要があります。

さて、始皇帝や前漢武帝による征服以降、珠江デルタ地域（主に平地1）でも、華北からの移住民が齊民として戸籍に登録され、徭役・税糧等を正規に負担することになったと思われます。ただし、少し詳しい状況がわかるのは唐代からです。唐代には、「土人」と非漢族の峒獠との2種類が存在していました。

このうち峒獠は、唐代には羈縻政策によって〈中間的存在〉の地位を享受していたと思われます。唐が滅んだあとの五代に、峒獠は南漢国を建国しますが、やがて北宋によって併合されます。北宋は、中国から独立したベトナムへの対策として、ベトナムと国境を接する欽州については羈縻政策を継続し、峒獠に〈中間的存在〉の特権を与えます。しかし珠江デルタ地域など、それ以外の峒獠地区では齊民化政策を実施していきますが、実際には宋元時代を通じて、齊民から離脱する峒獠が多数存在していました。

他方、唐代の「土人」の地位は齊民でした。ただし前述したように、「土人」と峒獠は生活空間や生業が同じで、かつ人口数は峒獠が圧倒的に多いため、「土人」は峒獠の動向に左右されやすく、峒獠が反乱を起こすとこれに加わる傾向がありました。すなわち、「土人」は齊民の身分に恒常的にはとどまらず、齊民から離脱するベクトルを有していたわけです。そして、かかるベクトルは、後述するように明代まで存続していきます。

以上、王朝側の齊民化政策にもかかわらず、元末においても峒獠は齊民化を拒否していました。また「土人」は峒獠の勢力下にあつて、齊民の地位から離脱するベクトルを有していました。つまり珠江デルタ地域では、元末に至っても、王朝に忠実な恒常的齊民がほとんど存在していませんでした。か

かる状況に大きな変化がおきるのが次の明代です。

3. 広府人の誕生（近世1）

洪武14年(1381)、明朝は齊民を対象に里甲制を全国的に施行します。そして、里甲に所属して徭役・税糧を正規に負担することと連動させて、齊民の戸籍における本籍地を「〇〇県〇都〇堡第〇里第〇甲〇〇〇戸」と、所属する里甲で表示させました⁽⁵⁾。なお、明初の珠江デルタ地域における里甲制の実施状況については不明な点が多いものの、峒獠も「土人」も、制度上は齊民として里甲に所属することになったと思われます。しかし、宋元時代と同じく、峒獠は正統年間(1436～1449)に齊民から離脱しようと反乱を起こし、「土人」の一部もこれに加わっていきます。反乱の原因については断片的にしかわかりませんが、宋元時代と同じく、〈中間的存在〉への回帰を求めているものと推測されます。

これに対して、明朝は反乱を鎮圧していきますが、「土人」の一部、とくにデルタ低地に住む「土人」のなかには、反乱を鎮圧するべく、明朝の側に就く者が登場してきます。これがのちに広府人と呼ばれる人々です。すなわち、「土人」の集合は明代に大きく2つに分裂するわけです。峒獠とこれに与する「土人」とによる反乱は明末まで続きますが、最終的には明朝とこれを支持する「土人」（広府人）によって鎮圧され、峒獠の姿は珠江デルタ地域から次第に消えていきます。

こうして明末には、珠江デルタ地域は明朝側に就いた「土人」＝広府人の世界となり、広府人社会が成立していきます。その場合、当該社会の成員資格として、反乱に参加せず一貫して明朝に忠実であったことが重要になったと思われます。反乱鎮圧後に明朝に帰順した「土人」（および峒獠）は、里甲所属の齊民とは区別され、「新民」として別系統で把握されたので里甲戸籍をもっていません⁽⁶⁾。換言すれば、里甲戸籍をもっていることが正統年間以前から明朝に帰順していたことの証左になります。したがって、里甲に所属して里甲戸籍を有していることが、広府人社会における成員資格として意

味をもつこととなります。

かくして誕生した広府人は、反乱鎮圧において王朝に忠実であり、また齊民として王朝の制度である里甲制に所属することに価値をおき、離脱するベクトルはもっていない、という歴史的な性格を有しています。その意味で、恒常的の齊民と呼ぶことができます。つまり、広府人の登場、そして広府人社会の成立は、珠江デルタ地域の歴史において、恒常的の齊民とその社会が初めて成立した点で画期的です⁽⁷⁾。

ここで、いままで史実にもとづいて述べてきた広府人の実像は、かれらが歴史の舞台に登場する際に作られた伝説と符合しているか否か、またこの伝説は広府人の誕生とどのような関連をもつかについて検討しましょう。

4. 珠璣巷伝説（近世2）

広府人の間に流布している有名な伝説として南雄珠璣巷伝説があります。本伝説は遅くとも明中葉には成立し、明末清初までに普及します。しかし、それは卑俗な内容が含まれる小説的、大衆的な説話であり、史実として全面的に信頼するのは困難です（牧野巽 1985 : 258, 263）⁽⁸⁾。本伝説については多数の研究がありますが、本伝説が作られた目的はなにか、本伝説にはなぜ「土人」が登場するのか、またなぜ荒唐無稽な内容が含まれているのか等、本伝説を読み解くうえで鍵となる部分は解明されていません⁽⁹⁾。そこで、以上の点を中心に本伝説の謎解きを行ってみましょう。

本伝説の「登場人物」は、広府人の祖先、珠江デルタ地域における先住者、そして当時の王朝の三者です。伝説内容のうち、これら三者に関する部分を要約すると以下になります。

史料 「南遷来由」（黄慈博輯『珠璣巷民族南遷記』南雄県志辦公室，1985年，pp.17-33）

南宋末期（1273年ごろ）、祖先たちは広東省北部の南雄珠璣巷を本籍地とし、第十四図民籍に所属していた。しかしある事件⁽¹⁰⁾を契機に、南雄府の役所から「路引」（転出証明書兼通行許可証）を発行してもらい、移住

先を求めて珠江デルタ方面へ南下した。そして、岡州大良都⁽¹¹⁾古萌甲萌底村を過ぎた時に、路銀が底をついた。そこで「土人」の馮天誠・龔応達らが提供する草葺きの小屋に投宿し、宿泊・食事の接待を受けた。暫しののち、祖先たちは萌底村に定着するべく、県の役所に赴いて転籍を申請するが、その際に馮・龔の保証を得たうえで「路引」を提出した。これに対して県は、凶甲を増設して戸籍を定め（「増立凶甲，以定戸籍」）、移住民のリーダー羅貴ら 10 名を新設する凶の十甲の里長戸とし、残りの者を甲首戸とした。知県は、羅貴らがすでに草屋を建て、農地を所有しているのので、税糧を納め徭役を負担することを約束させた。

まず広府人の祖先について整理しましょう。第一に、広府人の祖先の直接の出自は南雄珠璣巷となっています。南雄珠璣巷は広東省北部に位置し、梅関を経て南嶺を越えれば華中の江西省、さらに華北の中原へと通じる地理的位置にあります。この点から、多くの先行研究が、本伝説は広府人の祖先が中原出身であることを暗示することで、その漢族アイデンティティを強調していると指摘しています。第二に、広府人の祖先は、南雄珠璣巷での転出手続きと珠江デルタ地域での転入手続きを行っており、その移住は合法的なものです。第三に、広府人の祖先は、南雄珠璣巷では第十四凶民籍に所属し、移住後には凶甲（＝里甲。注 5 参照）に編入され、リーダーの羅貴らは里長戸になっています。本伝説の時代設定は、表面上は南宋末ですが、王朝の制度に関する時代設定は里甲制が存在する明代になっています。第四に、転入手続きの際に、凶甲制に所属する齊民として、徭役・税糧を正規に負担することを知県に約束しています。以上、第二・三・四から、本伝説における広府人の祖先像が、王朝の制度に忠実な齊民であることがわかります（西川喜久子 1994 : 215 ; Faure 1996: 40）。

つぎに馮天誠・龔応達等の「土人」について整理しましょう。羅貴ら広府人の祖先は珠江デルタ地域に到着したあとに路銀が底をつきます。その時、「土人」は宿泊と食事を提供し、さらに羅貴らが転籍手続きのために県の役所へ赴くときに保証人になっています。ここで、凶甲に編入される者（この

場合は広府人の祖先)の保証人(この場合は「土人」)が、当時の王朝の齊民ではないとは考えられません。そして、広府人の祖先のために図甲が「増立」されている点は、それ以前にすでに図甲が設置されており、それに所属する齊民が存在することを示唆しています。この既設の図甲に所属する齊民としては、まさに「土人」がふさわしいでしょう。以上から、本伝説に登場する「土人」の特徴として、①珠江デルタ地域の先住者であり、②広府人の祖先に対して敵対的ではなく、保護・保証を与え、③里甲制に所属する齊民であり、④姓に見られるように、漢族文化を一定程度受容している、等を指摘できます。そして、かかる特徴をもつ「土人」は、唐代の「土人」の末裔と考えることができます⁽¹²⁾。

以上、珠璣巷伝説では、広府人の祖先と「土人」とがどちらも図甲制に所属する齊民であり、また「土人」が広府人の祖先に対して世話をするという点から、両者の同質性・親和性が描かれていることがわかります。

5. 恒常的齊民への勧誘装置(近世3)

さて、珠璣巷伝説には、明代珠江デルタ地域に誕生した広府人の理念型を描写した内容とともに、注10で紹介している荒唐無稽な内容も含まれています。なぜ荒唐無稽な内容が含まれているのか、この点を伝説に「土人」が登場する意味とともに検討して、珠璣巷伝説が作られた目的を考えていきましょう。

まず広府人の理念型について、2つの点から検討します。第一は、広府人の出自元です。伝説では、広府人の祖先は宋代に珠璣巷から移住してきた者と設定されています。したがって、この理念に従うかぎり、先住者たる「土人」には広府人になる資格がありません。しかし前述したように、史実にもとづけば、広府人の実際の出自元は「土人」でした。つまり、広府人の出自元にかんしては、伝説の理念と実際とが食い違っています。「珠璣巷出自」という条件は後天的に獲得できませんから、もしこれを厳格に適用すると、広府人の人口数拡大にとって不利になります。

第二は、広府人と王朝との関係です。伝説では、デルタ到着後に県の役所で転入手続きをする際に、広府人の祖先は里甲（図甲）に所属して徭役・税糧を正規に負担すること、すなわち恒常的斉民となることを知県に約束しています。実際においても、珠江デルタ地域では20世紀前半まで里甲制が存続しており、また広府人の族譜には、里甲に所属して徭役・税糧を正規に負担することを標榜するものが多く見られます⁽¹³⁾。つまり、広府人は恒常的斉民であるべきという理念は、実際に実現されています。

ところで、伝説が示す理念にもとづくと、広府人社会は多数の恒常的斉民から成る社会となります。それでは、この多数の恒常的斉民はどのように調達されるのでしょうか。伝説に登場する珠璣巷から移住してきた家族（戸数）は、わずか97戸です。史実によれば、広府人が誕生するころの珠江デルタ地域では、峒獠が〈中間的存在〉への回帰を志向して反乱を起こし、また、「土人」も峒獠の動向に引きずられて反乱に加わっていました（片山剛2004：18-21；片山剛2006：45-47）。しかし一方で、デルタに所在する南海県の仏山堡・龍江堡や新会県の外海村などは反乱を鎮圧する側となり、明朝側に就いたことが判明します。ただし外海村は、当初は明朝側に就きましたが、飢饉が起きると逆に反乱を起こしています（片山剛2004：22；片山剛2006：47）。つまり、現実において、デルタの住民（「土人」）には恒常的斉民＝広府人になる者もいましたが、それは一部にすぎず、みながこぞって恒常的斉民になる保証はありませんでした。このように、当時の「土人」には、恒常的斉民へ向かうベクトルと、峒獠の反乱に加わるベクトルとの2つが存在していました。ここで、伝説における「土人」の設定は、峒獠と密接な関係をもつ役柄ではなく、自身が里甲制に所属する斉民であり、かつ移住してきた斉民が里甲制に帰属する際に世話をする役柄となっています。その理由を当時の社会状況から考えると、伝説は「土人」がもつ2つのベクトルのうち、恒常的斉民へ向かうベクトルを後押しし、「土人」が広府人となることを勧誘していた、と推測できます。

それでは、この伝説の筋書きが、単純素朴に「土人が広府人になる」という設定ではなく、わざわざ珠璣巷からの移住者という架空の存在を登場させ、

かれらが広府人になるという設定になっているのはなぜでしょう。つまり、〈北から来た漢族が広府人となる〉という図式にこだわるのはなぜか、ということです。漢族拡大の実際のあり方とは異なり、「非漢族、あるいは非漢族と漢族との混血が、後天的に漢族に転化する」という図式を理念とすること、これを漢族は好まないようです。かれらは理念の面では血統主義を重視する傾向が強く、「ある地域に漢族（のサブグループ）が存在するのは、中原などのいかにも漢族の発祥地からの移住によってである」のように、「先天的に漢族の血統を有する者が移住することで拡大した」という図式を好むようです⁽¹⁴⁾。

そこで、この理念と実際とのギャップを埋めるための方途が、伝説に荒唐無稽な要素を加えることであつたと思われまふ。これによって、伝説全体を厳格に読解・適用する必要がなくなり、弾力的に読解・適用してよいことが暗示されるわけです。具体的には、先天的要件である「珠璣巷出自」は、「珠璣巷出自」と仮構することを通じて、後天的に獲得できることになります。つまり、この伝説は、「恒常的斉民となることが肝要である。元来の出自は問わないが、恒常的斉民＝漢族となるなら、出自は珠璣巷と自称すべきである」という条件で、「土人」に恒常的斉民（広府人）となることを勧誘するために作られた装置と性格づけることができます。したがって、この伝説を受容した人々から成る広府人社会とは、伝説が指し示す理念に合わせるために、必要に応じて自分たちの出自を仮構している人々から成る集団といえるでしょう。

6. 伝説理解の変化（近代1）

列強による中国分割（「瓜分」）⁽¹⁵⁾と種族滅亡（「種滅」）との危機を迎えた清末の20世紀初頭に、社会進化論の影響を受けた漢族ナショナリズム⁽¹⁶⁾が生まれてきます。石川禎浩によれば、漢族ナショナリズムを醸成した装置のひとつとして「漢族西方起源説」があります（石川禎浩 2002：16-17）。これは、古代の中国には土着の「苗族」⁽¹⁷⁾が住んでいたが、西方の古代バビロニ

アから、漢族が黄帝に率いられて中国にやってきて、「苗族」と民族闘争を行い、その結果の優勝劣敗によって「苗族」を征服し、中国を漢族が住む中国にした、という説です。この漢族西方起源説は、改良派・革命派を問わず、清末の知識人に受容されていきます。というのは、当時の危機のなかで、かれら知識人は、西洋諸民族が漢族よりも相対的に優れた文明レベルにあることを肯定せざるをえませんでした。しかし、漢族としての自尊心を保持するには、序列化・差異化を行って自民族よりも劣位なものを設定する必要がありました。このような時期に、「苗族」を土着の劣位者とし、漢族を外来の偉大なる征服者＝優位者とする「漢族西方起源説」は、改良派・革命派を問わず、かれらの自尊心を満足させるものだったからです。なお「漢族西方起源説」は一般に、〈優者である外来の漢族〉対〈劣者である土着の非漢族〉という構図で、生存競争によって優勝劣敗に結果する、という筋立てになっています。

さて、この「漢族西方起源説」に見られる生存競争による優勝劣敗という歴史観の登場は、珠江デルタ地域についての歴史叙述にどのような影響を与えたでしょうか。この点を、優勝劣敗の歴史観を鼓吹した改良派知識人、梁啓超の故郷である広州府新会県を例に検討しましょう。検討するのは、梁啓超のいとこ譚鏞が総編輯として刊行した1908年刊『新会郷土志輯稿』のなかの「氏族」の項目です。なお、新会県は珠江デルタの西南部に位置し、その地勢は県の東西で異なっています。西部は丘陵・台地ですが、東南部は珠江デルタを構成するデルタのひとつ、新会デルタです。この地勢の相違によって、同一の県ではあっても、開発の時期や担い手が異なっています。

「氏族」の項目は、新会県における漢代以降の住民について叙述しています。登場する住民は4種類です。北方から広東に移住してきた外来者については、①〈漢代～唐代の移住者〉、②〈宋代以降の移住者〉に分けられています。①は「山」（山麓・丘陵・台地を指し、本稿の〈平地1〉）を生産・生活空間とする者です。②は中原から珠璣巷を經由して移住してきた者（つまり広府人の祖先）を指し、「陸」（デルタ低地を指し、本稿の〈平地2〉）を生産・生活空間とする者です。この区分は、デルタ低地の開発技術の有無に

照応しています。前述したように、低地開発技術の広東への移転時期は宋代以降ですから、北方からの移住者を唐と宋の間で区切るのは妥当といえるでしょう。

つぎに、土着の者については、③〈新会県土着の越民〉（具体的には峒獠を指す）、④新会県よりさらに西に住む「山獠」（〈山地〉で移動式の焼畑農業に従事する獠族）に分けられています⁽¹⁸⁾。

さて、①は低地開発技術をもたないので、その生産・生活空間は必然的に〈平地1〉となります。〈平地1〉には、同じく低地開発技術をもたない③が住んでおり、①と③は次第に相互同化していきます。そして、この①（及び①と③が相互同化した者）は、まさに『旧唐書』や珠璣巷伝説の「土人」に該当します。なお、のちの明代に①と②との間の生存競争が激しくなると、①は広義の越人の風俗・習慣に同化しているので、④とも連合して②と競争するようになると叙述されています。

一方、②はその技術を用いて、宋代以降に〈平地2〉を開発していきます。〈平地1〉には住まないで、③と相互同化する機会は少ないわけです。そして、潜在的には肥沃な土壌が堆積しているデルタを開発し、かつ便利な水上交通を利用することで、〈平地1〉に住む①や③の経済力を凌駕し、次第に「優勝の勢い」を占める優者になっていきます。これと対比して、①は相対的に劣者となり、明代には「優勝の勢い」を占める②との生存競争に敗れる、という筋になっています。

以上、『新会郷土志輯稿』は、優劣の基準を、北方から移住してきた外来の者か土着の者かには求めず、低地開発技術をもつか否かに求めています。①は北方からの外来者ではあっても、低地開発技術をもたないので、この点で③と同レベルです。そのため、③を征服する優者にはなれず、逆に③と相互同化していくこととなります。そして、①は③とともに、最終的には後来者たる②に征服される存在として描かれています。

『新会郷土志輯稿』には、「後至者」「優勝之勢」「新旧民族競争」「旧種」等の語が登場しますから、「漢族西方起源説」の優勝劣敗史観の影響を受けていることは明らかです。ただし、「漢族西方起源説」によく見られる〈外

来の漢族) 対 (土着の非漢族) という構図にはなっていません。北方からの移住者 (漢族) であっても低地開発技術をもたない者は、劣者として征服される存在として描かれており、(低地開発技術をもつ者) 対 (低地開発技術をもたない者) という構図になっていることが大きな特徴です。

ここに窺える歴史観は、明代に珠江デルタ地域の主人公となる広府人を、②の宋代に中原から珠璣巷経由で移住してきた者と考えており、広府人に関する基本設定において、珠璣巷伝説との違いはありません。一方、① (漢代～唐代の移住者) = 「土人」の取り扱い方はどうでしょうか。明代の「土人」には、恒常的斉民へ向かうベクトルと峒獠の動向に引きずられて反乱に加わるベクトルとの2つが存在しました。珠璣巷伝説は、このうちの前者のベクトルを後押しする方向で、「土人」と広府人との同質性・親和性を強調していました。しかし『新会郷土志輯稿』は、①の「土人」は低地開発技術をもたない劣位の者とし、③の峒獠とともに (低地開発技術をもたない者) のカテゴリーに一括しています。つまり越人 (峒獠) との同質性・親和性を強調し、広府人との序列化・差異化を図っており、珠璣巷伝説における構図とは大きく異なっています。なぜこのような違いが生じたのでしょうか。

1949年刊、盧子駿増修『新会潮連蘆鞭盧氏族譜』所収の巻26・雑録譜「蘆鞭開族瑣記」は、優勝劣敗史観の影響を受けて執筆されたもので、『新会郷土志輯稿』「氏族」の文章が引用されています。他方、この族譜の巻26・雑録譜「附録恩平盧氏族譜紀事」以下には、珠璣巷伝説が掲載されています。つまり、本稿での検討結果によれば、珠璣巷伝説に登場する「土人」と『新会郷土志輯稿』「氏族」に登場する① (漢代～唐代の移住者) (= 「土人」) とでは、広府人に対する位置づけがまったく異なっていますが、その2つが本族譜では、なんら矛盾がないかのように併載されているわけです。これは、珠璣巷伝説に「土人」が登場することの隠された意味や本伝説が作られた目的が、20世紀前半の珠江デルタ地域の知識人、具体的にはこの族譜の編修者、新会県潮連郷の盧子駿には理解されていないことを示唆します。

その歴史的背景は次のように推測されます。すなわち、まず、明末までに「土人」(さらに峒獠) のアイデンティティをもつ者が減少し、逆に広府人の

アイデンティティを持つ者が増大して、広州府・肇慶府が広府人の世界となっていく。つぎにその結果として、清代には、「土人」に対して広府人への転化を勧誘する必要が減り、広府人と「土人」との同質性が意識される機会が少なくなっていく。かくして清末・民国期には、珠璣巷伝説に内包されていた意味や本伝説が作られた目的を真に理解できる広府人はほとんどいなくなっていた、と。そして、清末に優勝劣敗史観にもとづいて、広府人と「土人」とを優・劣、征服者・被征服者の観点から差異化することが可能であったのも、如上の背景がすでに形成されていたからでしょう。つまり、清末・民国期の広府人は、その祖先たちが受容した時の目的や意味を知らずに、自らの由緒を示す伝説を読解していたわけです。

7. 広府人と客家人・潮州人（近代2）

広東省内には、中原からの移住伝説を有する民系として、ほかに客家人と潮州人（福佬とも呼ばれる）とが存在します。客家人の伝説は、晋代に中原から江西省へ移り、唐末の黄巢の乱のときに福建省（特に寧化県石壁洞）へ遷り、さらにその後に広東省へ移住したというものです。潮州人の伝説は、10世紀の五代十国期に河南省固始県から福建で閩国を建国することになる王潮・王審知兄弟とともに移住してきたというものです（牧野巽 1985:84-90, 93-97）。どちらの伝説も、珠璣巷伝説と同じく、祖先が中原から移住してきたとしており、それぞれ自分たちが漢族であることを主張しています。

それでは、広府人・客家人・潮州人の3者間において、各々の〈漢族である〉という主張は他の民系によってオーソライズされていたのでしょうか。この点を、漢族ナショナリズムが盛んであった20世紀初頭の事件について紹介している程美宝の研究にもとづいて一瞥しましょう。

20世紀初頭、光緒新政の一環として、初等教育における郷土教育のための教科書が各地の読書人によって編纂されます。そのうちのひとつに、1907年刊『広東郷土地理教科書』があります。これは反満の広府人、黄節（字、晦聞）が編纂したものです。黄節はこの本のなかで、客家人と潮州人を「漢

種」(＝漢族)のカテゴリーには入れず、「蛋民」とともに「外来諸種」に類別しました。そのため、客家人と潮州人から大きな反発と批判を受けます。そのため翌1908年に、客家人・潮州人を「外来諸種」とした部分を削除した再版を発行します。また、これを契機のひとつとして、客家人と潮州人の間での協力関係が深まり、客家人と潮州人(福佬人)がいずれも血統において純粋な漢族であることを主張する『漢族客福史』が1910年に出版されます(程美宝2003:81-82;程美宝2006:82-91)。

再版の『広東郷土地理教科書』は、1907年の初版で反発・批判を受けた箇所を削除し、代わりに、純粋な「漢種」として、初版にも登場していた秦代の移住者(「秦謫徙民處粵者」とともに、新たに唐宋以降の移住者(「唐宋以来中原氏族遷粵者」)が加えられています。後者に広府人が含まれているのはまちがいないですが、客家人や潮州人も含まれているか(すなわち、黄節が客家人・潮州人も漢族と認めたか)は判然としません。

以上の紹介だけでは、おそらくたくさんの疑問がでてくるでしょう。たとえば1907年時点では、黄節は客家人・潮州人を漢族と認めていませんでした。その場合、客家人や潮州人のあいだで浸透していた伝説の存在を黄節が知っていたか否かは、ひとつの興味ぶかい問題になります。かりに知っていて、漢族ではないという判断をしたとすれば、これは黄節が客家人・潮州人の移住伝説を虚構と考えたことを意味します。そして、それは広府人自身にもはねかえって、珠璣巷伝説が虚構である可能性をも考えざるを得なくなってしまうからです。黄節がどのような根拠にもとづいて客家人・潮州人を非漢族と考えたのか、これは今後の課題のひとつになるでしょう。

(追記) 本稿は、片山剛(2008)を中心として、これに片山剛(2010)・片山剛(2013)の内容を加えて、教材用に再構成したものです。

(注)

- (1) 6世紀の農書『齊民要術』では、地中からの水分の蒸発を防ぐ天水農業として、乾地農法が定式化されます。
- (2) いわゆる華北・華中・華南を指します。China proper は、かつては「シナ本部」と訳されていましたが、現在はピッタリの訳語がないので原語を

そのまま使用します。

- (3) 越人とは、浙江省からベトナム北部にかけて分布していた非漢族を指します。単一の部族ではなく、多数の部族が存在していたので、「百越」とも呼びます。「越」は「粵」とも書きます。現存する民族としては、瑤族（以前は「徭族」と記した）、壮族、ベトナムのキン族（ベトナム人）等があります。言語・生活空間・生業で大別すると、平地で水稻耕作を行うタイ語系と、山地で焼畑農業を行う非タイ語系とに分けることができます。なお、本稿での「越人社会」は、現在の広東省、広西チワン族自治区、ベトナム北部に存在したものを主に指しています。
- (4) 漢族を、時間と空間を越えて普遍的に定義するのは困難です。本稿では、広府人を想定して、理念型としては、①王朝との関係で齊民（後述参照）であること、②漢族アイデンティティのみをもつこと、③漢語（方言を含む）を話すことができ、漢字の読み書きを志向すること、と定義します。ただし実際には、この理念型から離脱するベクトルをもつ漢族も存在し、逆にこの理念型に近づくベクトルをもつ非漢族も存在します。
- (5) 珠江デルタ地域の場合、里甲制は、図甲制という名称で、明初の里甲制規定とは多少の相違を伴いつつも、20世紀前半まで存続していました（片山剛 1982）。
- (6) 「新民」とは、反乱鎮圧後に齊民に転化した「新たな齊民」の意味です。たとえば、童試（科挙受験資格を得るための試験）の受験には、一般に里甲戸籍の保有が必要とされていたので、「新民」の受験は非常に困難でした（片山剛 2000）。
- (7) 劉志偉（1997）や井上徹（2007）も、明代広東省の問題を考えるうえで齊民に注視しています。ただし非漢族や「土人」が齊民となったのちに、齊民にとどまる保証はなく、〈中間的存在〉に回帰するベクトルが働くこともある点に注意すべきでしょう。
- (8) 珠璣巷伝説を「史実」と考える研究として、古くは羅香林（1965）、最近では曾昭璇ほか（1995）、曾昭璇・曾憲珊（1995）があります（瀬川昌久 2008：269-270）。
- (9) 牧野巽（1985）と瀬川昌久（2008）は、珠璣巷伝説の誕生から今日まで、同伝説に一貫して内包されている意味を抽出したものです。これに対して本稿は、広府人が登場し、広府人社会の形成が始まる、まさにその時点で珠璣巷伝説が担った役割、および広府人による同伝説理解のその後における変容に焦点を合わせて検討しています。
- (10) 「ある事件」については、その詳細をここでは省略しますが、次のような荒唐無稽な内容です。すなわち、宋代に1人の妃が皇帝の宮中から密

かに逃亡して南雄に隠れ住んでいた。これを知った臣下は、この妃を亡き者とするために、妃とともに南雄の人々を賊として鎮圧しようとした。そこで南雄の珠璣巷に住む 33 姓 97 戸の人々は急いで移住した、と（牧野巽 1985 : 55-56, 255-256）。

- (11) 大良都は清代の順徳県大良堡を指すと考えられます。
- (12) 牧野巽も伝説に登場する「土人」を唐代の「土人」の末裔と考えていません（牧野巽 1985 : 259）。
- (13) 納税義務の条文を含む、雍正帝が作った聖諭広訓を掲載している族譜が多く存在します。
- (14) 後述する漢族西方起源説がその典型です。
- (15) 中国分割とは、香港島・九龍半島のイギリスへの割譲、台湾の日本への割譲、租界・租借地・勢力範囲の設定、ベトナムや朝鮮等の属国の喪失などを指します。
- (16) 中華民国成立以後は、漢族ナショナリズムを抑制する必要から、中華民族ナショナリズムに転化します。これが現在の「中華民族多元一体論」に続きます。さしあたり、村田雄二郎（2009）参照。
- (17) この場合、「苗族」という名辞は狭義の苗族のみならず、西南中国の非漢族全体を象徴するものとして用いられています。
- (18) 広東土着の者として、ほかに「水居の民」である蛋民が存在します。

（引用文献）

- 石川禎浩（2002）「20 世紀初頭の中国における“黄帝”熱：排満・肖像・西方起源説」『二十世紀研究』第 3 号，pp.1-22
- 井上徹（2007）「霍韜と珠璣巷伝説」『文化資源としての宗族：中国の系譜と伝説』大阪市立大学大学院文学研究科／都市文化研究センター／東洋史研究室，pp.15-28，所収
- 薄井清（1976）『土は呼吸する』社会思想社（現代教養文庫）
- 片山剛（1982）「清末広東省珠江デルタの凶甲表とそれをめぐる諸問題：税糧・戸籍・同族」『史学雑誌』91 編 4 号，pp.42-81
- 片山剛（2000）「清代中期の広府人社会と客家人の移住：童試受験問題をめぐって」山本英史編『伝統中国の地域像』慶應義塾大学出版会，pp.167-210 所収
- 片山剛（2004）「“広東人”誕生・成立史の謎をめぐって：言説と史実のはざまから」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 44 巻，pp.1-32
- 片山剛（2006）「中国史における明代珠江デルタ史の位置：“漢族”の登場とその歴史的刻印」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 46 巻，pp.37-64

- 片山剛 (2008) 「近世・近代 広東珠江デルタの由緒言説」『歴史学研究』847号, pp.23-31, 80. なお, 本論文の増補版は, 歴史学研究会編『由緒の比較史』青木書店, 2010年, pp.97-123, 所収。中国語訳は, 蘇龍嘎訳「有關近世廣東珠江三角洲地區歷史由來的言説」『日本中國史研究年刊2008年度』上海古籍出版社, 2011年, pp.280-298, 所収
- 片山剛 (2010) 「黄河文明・血統・アイデンティティ」『記念会だより』懷徳堂記念会, 86号
- 片山剛 (2013) 「歴史学の醍醐味をどう伝えるか」『史学雑誌』122編3号, pp.35-37
- 瀬川昌久 (2008) 「南雄珠璣巷をめぐる広東ローカリズムと中華ナショナリズム」塚田誠之編『民族表象のポリティクス 中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社, pp.263-296
- 西川喜久子 (1994) 「珠江デルタの地域社会: 新会県のばあい」『東洋文化研究所紀要』124冊, pp.189-290
- 濱島敦俊 (1990) 「明代の水利技術と江南地主社会の変容」川北稔編『生活の技術 生産の技術』岩波書店, pp.75-103, 所収
- 原宗子 (2005) 『「農本」主義と「黄土」の発生: 古代中国の開発と環境2』研文出版
- 牧野巽 (1985) 『中国の移住伝説 広東現住民族考』(牧野巽著作集 第5巻) 御茶の水書房
- 村田雄二郎 (2009) 「中華民族論の系譜」, 飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史1 中華世界と近代』東京大学出版会, pp.207-229, 所収
- 程美宝 (2003) 「由愛郷而愛国: 清末広東郷土教材的国家話語」『歴史研究』2003年第4期, pp.68-84
- 程美宝 (2006) 『地域文化与国家認同: 晚清以来「広東文化」観的形成』生活・読書・新知三聯書店
- 劉志偉 (1997) 『在国家与社会之間: 明清広東里甲賦役制度研究』中山大学出版社
- 羅香林 (1965) 『客家史料匯編』香港・中國學社
- 曾昭璇ほか (1995) 『珠璣巷人遷移路線研究』暨南大学出版社
- 曾昭璇・曾憲珊 (1995) 『宋代珠璣巷遷民与珠江三角洲農業發展』暨南大学出版社
- Faure, David (1996) “Becoming Cantonese, the Ming Dynasty Transition,” in *Unity and Diversity: Local Cultures and Identities in China*, ed. Tao Tao Liu

(参考文献)

牧野巽 (1985) 『中国の移住伝説 広東現住民族考』(牧野巽著作集 第5巻)
御茶の水書房

本書は、珠璣巷伝説などの中国各地に伝わる移住伝説について、現在の居住地域・言語・習俗の同一性だけでなく、過去に祖先が同じ場所から移住してきたという歴史の共通性も有しており、その意味で現住地と原住地に関する二重の同郷観念が強調されていることを指摘しています。珠璣巷伝説等について学術的な照明を当てた画期的業績です。

瀬川昌久 (2008) 「南雄珠璣巷をめぐる広東ローカリズムと中華ナショナリズム」塚田誠之編『民族表象のポリティクス 中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社, pp.263-296

本論文は、珠璣巷伝説のなかに、広府人(瀬川の用語では「広東本地人」)のローカルな自己意識の表出を見いだすとともに、本伝説において広府人が中華世界の「内的存在」として定位されていることを指摘しています。恒常的斉民は中華世界の「内的存在」を制度的に表象するもののひとつですから、瀬川の観点は本稿の観点と通底するものがあります。

石川禎浩 (2002) 「20世紀初頭の中国における“黄帝”熱：排満・肖像・西方起源説」『二十世紀研究』第3号, pp.1-22

本論文は、清末に漢族ナショナリズムを醸成した“黄帝ブーム”が、1903年の東京で、留日学生による愛国主義運動を反清革命運動に転化させるために企図されたものであること、また、漢族が優れた征服者である証しとなる「漢族西方起源説」が、やはり当時の日本における不可思議な偶然のなかで誕生したことを、丹念な史料探索から明らかにしています。

程美宝 (2003) 「由愛郷而愛国：清末広東郷土教材的国家話語」『歴史研究』2003年第4期, pp.68-84

本論文は、20世紀初頭の光緒新政期に清朝が進めた郷土教育の政策に呼応して、地方の読書人が初等教育用の教材として編纂した「郷土志」(従来の地方志に類似)と「郷土教科書」について考察しています。そして、清朝が「愛郷」(郷土愛)の育成を通じて「愛国」意識を培おうとしたこと、また、漢族ナショナリズムが興っていた当時、広東省ではどの「民系」を漢族とみなすかの点において、いずれも漢族を自認する広府人・客家人・潮州人のあいだで、見過ごすことができない見解の相違が存在していたことを明らかにしています。